

令和元年6月19日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02323

研究課題名(和文)「カルペ・ディエム」の政治性 - 17世紀イギリス詩と千年王国思想について

研究課題名(英文) Carpe Diem Poetry in Seventeenth-Century England

研究代表者

富樫 剛 (Togashi, Go)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：30326095

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：Carpe diem(今日の花を摘もう=今という時間を楽しもう)という古代ローマ以来の思想・文学的テーマが16-17世紀のイギリスにおいて受容され、流行した際の政治・社会的背景を明らかにした。その背景とは、宗教改革以降英語聖書・祈祷書の広まりとともに厳格化したキリスト教信仰、カルヴァンらの予定神学とともに広まった来世に対する関心や不安、ローマ・カトリック教会を悪と見なす黙示録的終末論であり、またこれらを手段としてなされた社会論争・闘争であった。詩人たちは、来世でなく現世の、正しさではなく楽しみの重要性を説くべく、カルペ・ディエム詩を書いたのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、16-17世紀イギリス文学におけるギリシャ・ローマ古典の決定的な重要性を明らかにしたことであり、またイギリスにおいて宗教改革とルネサンス(古典の復興)が同時期におこった理由およびそれらがもたらした特異な結果(17世紀の内乱・王の処刑)を時系列的に説明できるようにしたことである。加えて、当時の重要作の翻訳を多数作成して日本語で読めるようにした。

研究成果の概要(英文)：This study has made it clear why poets so often sang of such classical themes as carpe diem (from Horace and Ovid), beatus ille (Horace), sapiens (Seneca), and ataraxia (Epicurus) in sixteenth- and seventeenth-century England. It was the period in which Christian teaching became more rigorous with the spread of English bibles and prayer books, of the Calvinist doctrine of predestination, and of apocalyptic eschatology attacking the Roman Catholic Church as Antichrist, the Beast, or the Whore of Babylon. Singing classical poetry was then a way to argue against such rigour, to express a preference for this world over the next, for quiet and relaxed life over overspirituality, and for King Charles over Parliament and the Army that criticised and waged war against him as Antichrist.

研究分野：イギリス文学

キーワード：イギリス 詩 ホラティウス オウィディウス カルペ・ディエム 宗教改革 ルネサンス 幸せな人

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

この研究開始当時の日本において、16-17世紀イギリスにおけるギリシャ・ローマ古典の翻訳・翻案を扱う研究は少なく、また当時の古典翻訳・翻案の流行の政治・社会的背景を考える研究はさらに少なかった。つまり、その後のイギリス詩確立に際して最大の影響を及ぼしたと考えるべきものに関する文学史的研究が十分なされてきたとは言えない状況であった。

加えて、16-17世紀イギリスで書かれた古典翻訳・翻案、特にホラティウスの「幸せな人」(*beatus ille*)の主題を扱う作品のほとんどに対して日本語訳が存在せず、また「今日という花を摘もう」(*carpe diem*)というホラティウスのオード 1.11 (および多数の他の作品)以来の主題についても、オウィディウスの『恋の技法』3巻における薔薇の主題と混同されて理解されていた。ホラティウスの「今日という花を摘もう」という主題が、セネカの「賢い人」(*sapiens*)やエピクロススの「安らかな心」(*ataraxia*)と混淆しつつイギリス詩に導入されていたことも理解されてきていなかった。

国際的に見ても、概説書 *Oxford History of Literary Translation in English* シリーズ (2005-) や学術雑誌 *Translation and Literature* (1992-) の刊行からわかるよう、翻訳・翻案文学一般への関心は高まってきていたとはいえ、その政治・社会的意義や文脈は未だ解明からほど遠い状況であった。逆に16世紀の宗教改革から17世紀の内乱にかけてのイギリスの社会・政治・宗教についての研究は(当然イギリスにおいて)盛んになされてきたが、これらの歴史研究が文学テキストやその流行・発展のありかたまで扱うことは極めて少なく、さらに古典の翻訳・翻案まで視野に入れた研究は稀であった。

2. 研究の目的

国内外の従来の研究における以上の死角・盲点を消すことが本研究課題の目的であった。すなわち、16-17世紀イギリス文学史研究に政治・社会・宗教史の知見を深く正確に反映させること、逆にイギリス政治・社会・宗教史に文学・文化史の視点を有意義なかたちで接合すること、そしてこれらの成果に加え16-17世紀イギリスにおいて歴史的に重要と言える古典翻訳・翻案を日本に紹介すること、である。これは高度に専門的な研究であるが、イギリスや欧米の文学・文化・歴史・社会に関して一般に広まっているイメージ・固定観念を若干なりとも修正することにつながればと思い、調査・研究・学会発表・論文等執筆に取り組んだ。

3. 研究の方法

資料収集・精読・学会/論文/ウェブサイトにおける研究成果発表・フィードバック収集を毎年度くり返した。一次資料は基本的に Early English Books Online から16-17世紀のファクシミリ版を収集、二次資料は新刊・古書を広く収集して使用した。作品解釈に必要な場合、カリスブルック城など史跡に赴き現地での調査をおこなった。

4. 研究成果

Carpe diem (今日の花を摘もう = 今という時間を楽しもう) という古代ローマ以来の思想・文学的主題が16-17世紀のイギリスにおいて受容され、流行した際の政治・社会的背景を明らかにした。その背景とは、宗教改革以降英語聖書・祈祷書の広まりとともに厳格化したキリスト教信仰、カルヴァンらの予定神学とともに広まった来世に対する関心や不安、ローマ・カトリック教会を悪と見なす黙示録的終末論であり、またこれらを手段としてなされた社会論争・闘争であった。詩人たちは、来世でなく現世の、正しさではなく楽しみの重要性を説くべく、カルペ・ディエム詩を書いた。古典の翻訳・翻案は、16-17世紀にかけて厳格化していった、そして最終的に内乱・王の処刑という国家の破綻をもたらしたキリスト教思想・道徳に対する抵抗の意思・意志表明手段だったのである。以下詳細の概略である。

(1) 16世紀: オウィディウス、アウソニウス、ロンサール、タツソ

「カルペ・ディエム」とはホラティウスのオード 1巻 11番からのフレーズであるが、実際にこの主題がイギリスに導入されたのはホラティウスからではなくオウィディウスの『恋の技法』3巻から、またこれを翻案した16世紀フランス詩人ロンサールの「カッサンドルへのオード」17や『続恋愛詩集』(「マリーへのソネ」) 35、同じく16世紀のイタリア詩人タツソの『解放されたエルサレム』エピソード 15からであった。これらの翻訳・翻案としてダニエルの『ディーリア』31やスペンサーの『妖精の女王』2.12.74-75が書かれた。これらの作品の指標は "Love whilst . . ." の類の公式的表現である。イギリスにおけるカルペ・ディエムは、16世紀に流行した恋愛詩の一構成要素、ペトラルカ的なオクシモロンやマゾヒズム、フランス流のブラゾンなどと並ぶ恋愛詩のパターンであった。

当時の恋愛詩には社会的・宗教的意義があった。ペトラルカ的な宮廷風恋愛は、十戒の禁じる姦淫・不倫の悪を純愛路線で中和する、斬新かつ絶妙な恋愛表象であったことだろう。女性の体の魅力を逐一語るブラゾンは同じく十戒に対する挑発姿勢を示す。誘惑・享乐的なカルペ・ディエム詩も同様であり、だからそれは『妖精の女王』では悪として退治され、ダニエルの『ディーリア』31-34では「永遠の愛」という無難な主題と中和されている。

(2) 17世紀 (I): オウィディウスとカトウルス

英語版カルペ・ディエム詩の第二波は、マーロウ訳によるオウィディウスの『恋の歌』1.5「コリンナと寝た午後」やカトゥルス 5「レズビア、生きてるうちに愛しあおう」によってもたらされた。マーロウ訳オウィディウスおよびその発展的翻案であるダンのエレジー8「恋人とベッドへ」は、「恋のお遊び」(sport)という表現および女性のからだ各所を逐一舐めまわすような描写をイギリス詩にもたらした。カトゥルス 5からは「日はまた昇るが人は死んだらそれで終わり」という比喩がとり入れられた。これらを組みあわせ、17世紀の詩人たちは女性を性的に誘惑するカルペ・ディエム詩を書いた。ジョンソンは、オウィディウスの「お遊び」とカトゥルス 5の日没、さらにマルティアリスのエピグラム 1.34の「浮気はいいが、ばれてはいけない」という教訓を接合して『ヴォルポーネ』の挿入歌「シーリアに」を書いた。トマス・ケアリの『恍惚』はこの路線の頂点に君臨する超大作であった。

これらの作品は、文学的には、詩人たちがペトルカ風・ロンサール風の恋愛詩に飽きたこと、創作の源が世紀・王朝の転換とともにルネサンスの大陸から古代ローマへと移行したことを示す。同時にそれらは、前述のキリスト教性道徳への直接的な抵抗姿勢の表明でもあった。英語で読めるようになった聖書・祈禱書の厳守を主張し「姦淫には死を」などと説く者に対して詩人たちは、古典の知性・権威を盾に「悪くていいことをしよう」と挑発的なメッセージを発していたのである。

(3) 17世紀(II): ホラティウス(セネカ、マルティアリス)

「カルペ・ディエム」という表現の発信源であるホラティウスのオードの翻訳・翻案が本格的にはじまったのは17世紀に入ってからであった。このフレーズ自体、英語に定着したのは19世紀のバイロン以降である。最初のホラティウスの翻訳選集はジョン・アシュモアなる人物によるもので、1621年に出版された。続いてトマス・ホーキンスなる者の選集が1625年に出版された。ホーキンス版はその後1631年、1635年、1638年、1652年に再刊・改版されており、ホラティウスへの関心・需要の高まりが見てとれる。

これらの選集は教訓的な内容の詩を集めて翻訳したものであり、享樂的なもの、たとえば「カルペ・ディエム」という表現を含むオード 1.11などは収録されていない。当時のホラティウスはラテン語教科書の詩人であり、エポード 2に端的に見られるように、都市生活に伴う奢侈・喧噪・野心・争い・不安からの解放、田舎への隠遁、人として自然な感情・欲求に即しつつ質素で満ち足りた暮らしを送る「心安らか」で「賢い人」「幸せな人」を歌う詩人であった。(この主題は、マルティアリスのエピグラム 10.47、セネカの『テュエステス』のコロスの歌などによって16世紀から広まっていた。)ホラティウスの「カルペ・ディエム」における今日という日の楽しみかたは、知的で教訓的なもの、恋愛とは無関係なものであった。

この主題もまた広くキリスト教の来世志向の対極にあり、また局所的には宗教改革以降広まっていた予定の教義——天国行きの希望や地獄落ちの不安、およびそこから由来する日記の習慣など——に対する対立姿勢の表明をあらわしていた。また、反キリスト(=ローマ・カトリック教会)の破滅・千年王国到来等を謳う黙示録に依拠する終末論に対する否定・批判・嘲笑をあらわしてもいた。現状に満足する「幸せな人」とは来世に期待しない人、他を愚弄して争いをもたらさない人、内乱期においては、反キリスト的——カトリック回帰に向かう——として国教会や国王チャールズ1世を攻撃しない人であった。

(4) 17世紀(III): アナクレオン

17世紀のカルペ・ディエム詩の重要な源としてアナクレオン風の詩(Anacreontea)もあった。アナクレオンは紀元前6-5世紀イオニアの詩人だが、実際には彼の作ではない詩が16世紀半ば、フランスのアンリ・エティエンヌのラテン語訳によってヨーロッパ中に広まっていた。それらの作品が、たとえばロンサールのソネット(「恋をしない人は不幸」)などの翻訳・翻案をさらに経由してワトソンのソネット集『恋の歌100』によって16世紀イギリスに導入された(アナクレオン 46/29 [Estienne/modern]、ワトソン 27)。スペンサーも『アモレットィ』と『エピサラミオン』のあいだにアナクレオン 40/35の翻案をはさんでいる。

イギリスで最初にアナクレオンを集中的にとりあげたのはヘリックであり、15/8、24/40のようなカルペ・ディエム詩を扱いはじめたのも彼であった。これらはカウリーによる傑作アナクレオン 11篇によってさらなる完成を見る(1656)。特筆すべきは頹廢的な最後の4篇、「今を楽しむ」といいながらむしろ攻撃的・自虐的で、今を楽しむこと以外の選択肢が気に入らない、やむをえず楽しむしかない、という体の8-11である。王妃に直接仕えていたカウリーが、内乱・王の処刑等上記千年王国思想がもたらした政治的帰結をすべて見た後に書いた、間接的かつ痛烈な政治・社会的声明と理解すべきであろう。

(5) 17世紀(IV): ルクレティウス

16-17世紀のイギリスにおけるギリシャ・ローマ古典翻訳・翻案の発達・発展に関係して、もうひとり重要なのがローマの詩人ルクレティウスである。16世紀末にパットナムは『詩論』で世界の起源について考えた——「ピューリタンの人はこの世界を神がつくったと信じている」が、「麦の粉や砂、それから光のなかでキラキラ光る埃などよりずっと小さな細かい粒が集まって固まってできたという人たちもいる」。この後者の原子論の背後にあるのが、神による天地創造を否定するルクレティウスの『事物の本質について』である。『事物の本質』の英語版が

刊行されたのは 1655-56 年のイーヴリン訳、スタンリー訳（それぞれ部分訳）が最初だが、すでに 16 世紀後半からこれが読まれ、広まっていたことがわかる。

ルクレティウスの原子論の問題は、魂も原子からできた物質であって死ぬ、と考えることである——「精神や魂はそれ自身だけでは無力である。それは肉や血と、神経や骨と混ざって存在している」——「体がバラバラに切り刻まれたら、魂もバラバラに切り刻まれる」——「バラバラになるものが不死ということはありません」。この反キリスト教的な思想がマーヴェルの「はにかむ恋人に」のなかでカルペ・ディエムの主題と結びつくのは、言わば当然のことであった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

(書評、査読あり)富樫剛「松本舞『ヘンリー・ヴォーンと賢者の石』」『英文学研究』(2019、予定)

〔学会発表〕(計 7 件)

富樫剛、「(永遠の)生か、死か、それが問題だ：16-17 世紀の予定神学と Milton, *Paradise Lost*」, 日本ミルトン協会第 10 回研究大会 (シンポジウム『ミルトンと神：「正しき神の摂理」をめぐって』), 2018 年 12 月 1 日、青山学院大学

富樫剛、「抵抗の文化から共感の文化へ：宗教改革以降 200 年のイギリス文学史」, 科研費基盤研究 B「近代イギリス女性作家たちの言語態と他者：感受性、制度、植民地」研究会 (招待講演), 2018 年 3 月 27 日、上智大学

富樫剛、「古典主義とは何か：反ピューリタン言説から感受性の議論へ」日本英文学会関東支部第 15 回大会 (シンポジウム『イギリス・アメリカ文学史補遺 (2)：18 世紀の詩』), 2017 年 10 月 28 日、中央大学後楽園キャンパス

TOGASHI, Go, "Carpe Diem for the Millenarians?: Rereading "To His Coy Mistress", Renaissance Society of America, March 31, 2017, Palmer House, Hilton, Chicago

富樫剛、「カルペ・ディエムの諸系譜：Andrew Marvell, "To His Coy Mistress" を読み直す」, 日本英文学会中国四国支部秋季大会 (招待発表), 2016 年 10 月 29 日、愛媛大学

富樫剛、「カルペ・ディエムの系譜：抵抗の歌、薔薇の歌」, 日本英文学会関東支部夏季大会 (シンポジウム『イギリス・アメリカ文学史補遺：英米文学のなかの非英米文学』), 2016 年 6 月 18 日、青山学院大学

富樫剛、「Paradise Lost はキリスト教叙事詩か」, 日本ミルトン協会第 6 回研究大会 (シンポジウム『"Overturn, overturn, overturn": *Paradise Lost* をひっくり返す』), 2015 年 12 月 5 日、龍谷大学深草キャンパス

〔図書〕(計 2 件)

富樫剛 (共著、査読あり) 17 世紀英文学会編『17 世紀英文学における生と死』(金星堂、2019 予定)、「(魂の)生か、死か、それが問題だ：16-17 世紀の予定神学とミルトンの『失樂園』」

富樫剛 (共著、査読あり) 17 世紀英文学会編『17 世紀の革命/革命の 17 世紀』(金星堂、2017)「今日の花を摘む心安らか賢い幸せな人：『トテル撰集』からマーヴェルの「ホラティウス風オード」まで」(pp. 1-27)

〔産業財産権〕

○出願状況 (計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

○取得状況 (計 件)

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ
English Poetry in Japanese
<<https://blog.goo.ne.jp/gtgsh>>

電子ブック

Henry More, *Henry More, The Apology of Dr. Henry More, Fellow of Christ's College in Cambridge: Wherein Is Contained as Well a More General Account of the Manner and Scope of His Writings, as a Particular Explication of Several Passages in His Grand Mystery of Godliness* (London, 1664)
<https://www.library.ferris.ac.jp/henry_more/henry_more.html>

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。